

## 江戸時代文献「うつろ船の蛮女」に描かれている「宇宙文字」の正体

皆 神 龍 太 郎

この小論では、江戸時代の文献「うつろ船の蛮女」(以後、うつろ船)のイラストに残されている、空飛ぶ円盤にしか見えない乗り物の内部に描かれていたという、通称「宇宙文字」の正体について考察を行う。宇宙人やUFOといった概念さえなかった江戸時代の文書に、なぜ空飛ぶ円盤や宇宙文字と思われる記号が書かれていたのか？

「うつろ船」の筆者は、『南総里見八犬伝』などの読本作家として知られる滝沢馬琴とその息子の宗伯。以来約200年間、誰も解読できなかった謎の文字だが、その正体について合理的な説明を、この小論で与えてみたいと思う。結論を先に書いておくと謎の文字の正体は、宇宙人が使っていた文字などでなく、高校の教科書にも必ず掲載されている、歴史的に有名な「あるマーク」であった。

「うつろ船」は、文政八(一八二五)年に江戸で開かれていた「兔園会」という会合で、滝沢馬琴らが公にした話だ。兔園会とは、馬琴の発案で、当時江戸にいた好事家たち十二人が月に一回互いの家へと集まり、奇妙な話を持ち寄り発表しあったという会合のことである。

その内容は後に『兔園小説』という冊子にまとめられた。長らく出版されなかったが、書き写される形で次第に世に知られるようになった。「うつろ船」の話とは、馬琴らが発表を行う二十一年前の享和三(一八〇三)年に、今の茨城県(常陸国)の「はらやどり」という浜に奇妙な形をした「うつろ船」が流れ着き、その中から手に箱を携えた異国の美女が現れたという逸話である。

この「うつろ船」の話が、数多ある怪奇譚の中でも、いまだに人々の関心を強くひいているのは、文章だけでなく、同時に船や女性のイラストが添えられていたためである。もし、うつろ船文献にイラストが描かれていなかったとしたら、これだけ後世に関心と呼ぶことはなかっただろう。文書に描かれている船が、今で言うところのUFOや空飛ぶ円盤の姿にあまりによく似ているのだ(図1参照)。

天理大学図書館に残る『兔園小説』の原本にある色付きのイラストには、今で言えば空飛ぶ円盤にしか見えない奇妙な乗り物と、その中に乗っていたという異人の女性、そして船内に描かれていたという、通称「宇宙文字」と呼ばれる奇妙な幾何学模様が描かれている。

なおイラストに添えられている文書には、船の上部はガラス窓が付  
けられて明かりが取れるようになっており、船の下部は鉄板によつて  
補強されていたことなどが記されている。

うつる船に関する同様なイラストや記述は、この『兎園小説』以外  
にも、屋代弘賢の「弘賢随筆」や長橋亦二郎の「梅の塵」といった江  
戸時代の文書に残されている。うつる船研究者である田中嘉津夫岐阜  
大名誉教授の調査によつて、同様なうつる船のイラストは、現在まで  
に少なくとも八種類残されていることが確認されている。



図1 (日本随筆大成より)

「うつる舟」に現れる宇宙文字に  
ついて考察を始める前にまず、『兎  
園小説』に記されている、「享和三  
年に常陸国のはらやどりという浜に  
「うつる船」が流れ着いた」とする  
事件は、実在しなかった可能性が高  
い、ということを確認しておきたい。  
つまり、一部のUFO信者が主張し  
ているように「うつる舟は、江戸期  
に宇宙人が日本を訪れていた動かぬ  
記録である」という主張は成り立た  
ないのである。

というのは、『兎園小説』では、  
うつる船が流れ着いたとされる浜に  
ついて、小笠原越中守の知行地であつ  
た「はらやどり」という土地であつたとしている。だが、当時の常陸  
国の海岸線沿いには小笠原越中守の知行地などなく、また「はらやど  
り」という地名も存在していなかった。つまり、架空の地名であつた  
ことが、田中名誉教授の調査によつて明らかにされているからだ。  
さらに、イラストは付随していないものの、うつる船と同様な話だ  
けでよければ、『兎園小説』の以前にもいくつかの記述が残されてい  
る。

神坂次郎のベストセラー『元禄御畳奉行の日記』(中公新書)で有  
名になった朝日文左衛門の日記『鸚鵡筆記』の中の元禄十二(一六

九九)年六月五日の項にも、次のようなうつる船に関する記述が残されていることを、田中名誉教授が見つけ出している。

今日熱田海へ空穂船着頃日伊勢に有、流れ来ると。窓有びいどろにて張し之。内に宮女あり。甚美也、其側に坊主の首、大釘に貫て有り。干菓子を以て食とす。書付ありて発船の日を記し、百日後は何方にても取り上べしと云々。此説専ら有て、大方見たるやうに、吾人云ふ。或は云、金廿両ありとも云。共に虚説也。しかれども他国にも沙汰有。或人云。盗の智詐と。又は狂言の趣向にせんためか。

明らかに馬琴の「うつる船」と同内容を伝えている逸話であり、「今日流れ着いた」という形で、当時巷で語られていたうわさをリアルタイムに書き残している。だが、この日記の日付は、「兎園小説」で事件があったとされている享和三(一八〇三)年より百年以上も前のことである。熱田にうつる船が漂着したということ、朝日文左衛門は賢明にも「虚説也」と切り捨て、ガセネタに過ぎないことを見破っている。

これらの例から分かるように、うつる船伝説は、当時実際に起きたことではなく、江戸期に何度か現れては消えていった定番の「都市伝説」の一つであったと考えるべきだろう。

なぜ空飛ぶ円盤そっくりの乗り物が江戸時代の文献に描かれているのか、というその謎については未だ解かれていないが、うつる船の中に描かれていたとされる通称「宇宙文字」の正体については、ほぼ正解と思える解答を見つけ出すことができたので、以下に論証していきたい。

この宇宙文字については最初に論じたのは、日本民俗学の父・柳田國男だろう。彼は大正期の末に書いた「うつぼ舟の話」(『定本柳田國男集』第九巻)の中で、この文字を取り上げ、以下のような考察を加えている。

舟の中に書いてあったと称して、写し取って居る四箇の異形文字が、今では最も明白に此話の駄法螺なることを証明する。それを曲亭馬琴が註解して、最近浦賀の沖に繫つたイギリス船にも此等の蛮字があつた。だからこの女性はイギリスかもしくはベンガラ、もしくはアメリカなどの蛮王の女なりけんか。是も亦知るべからず、尋ねまほしきことなりかしなどなど、例の恐ろしく澄ましたことを言つて居る。さうして今日までまだ其儘になつて居たのである

柳田は、うつぼ船の船中であつたとされる四個の文字をデタラメな文字だと考えたので、うつる船の話もまた「駄法螺」であると判断を下したようだ。柳田が大正十五年に中央公論に「うつぼ船の話」を發表したその当時は、うつる船の文字は「この世にない文字」だからイコール「駄法螺」に違いない、という解釈でも問題はなかった。

だが、戦後になるとこの解釈だけでは押しきれなくなった。一九四七年六月二十四日、米国西海岸のワシントン州で、ケネス・アーノルドという青年実業家が、当時は存在していなかった超音速で飛ぶ九機の謎の飛行物体を目撃。その飛行物体が「空飛ぶ円盤(フライング・ソーサー)」と名付けられたことから、「宇宙人地球飛来説」が生まれたのだ。

この日以降、「この世にない文字」ということが、直ちに「駄法螺」

ということの意味せず、もしかしたら地球上にない文字ならば「宇宙人の文字なのかもしれない」という、新たな解釈の余地を許すこととなった。うつろ船が、そもそも空飛ぶ円盤そっくりであったことから、その船内にあつた解読不可能の文字についてもまた、宇宙文字ではないかと思ふ解釈が可能となつたわけである。

果たして、どこにもない文字だから「駄法螺」だという柳田の解釈が正しいのか、はたまたどこにもない文字だからこそ「宇宙文字」だとするUFO信者の解釈が正しいのか？ 筆者は、そのどちらの解釈も間違いだと考えている。「どこにもない文字」と見なす、その前提自体が間違つていてはないかと思うからだ。逆に言えば、この文字がどこから来たのかということが分かりさえすれば、「宇宙文字」の謎は解けるのではないかと思われる。

図2が、うつろ船のイラストの中に出てくる通称「宇宙文字」である。なんとも奇妙な文字列だが、上から二文字目は「正」のようにも「王」のように見える。線分だけからできているので最も文字っぽく、この文字だけなら、例えばハンゲルなどにもありそうな気がする。

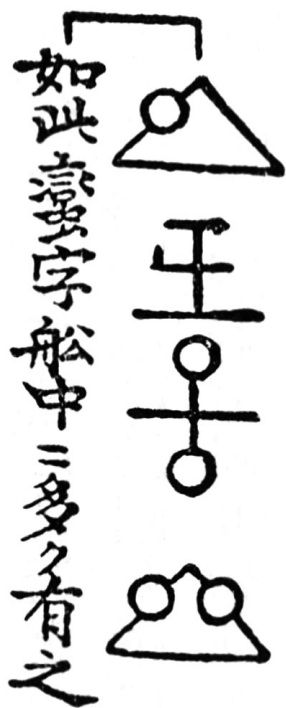


図2

その次に書かれている、二つの円が十字の棒でつながっている文字もかなり奇妙だが、最も解釈し難いのが、最初と最後に描かれている三角形と丸からできている文字であろう。一番上の文字は、三角形の左斜辺だけに丸が乗っついていて、一番下の文字では両斜辺の上に小さな丸が乗っている。

まるで正面からカエルをみたような三角形の文字が、少し形を変えて二度描かれ、タブつて表記されていることを鑑みると、「宇宙文字」の中でも、何か特別なキーとなる文字なのではないかと推測される。

そこで、この三角文字に似た記号が、どこかにないかと探したところ、このマークが、あちこちに現れる祭りが、長崎に存在していることを見つけた。毎年十月に長崎で開かれている有名な「長崎くんち」である。七年に一回繰り出す、長崎市の元石灰（もとしっくい）町という町が出す船の形をした山車には、その帆をはじめとして、踊っている人々の鉢巻きや浴衣などのあちこちに、この謎の三角マークそっくりの図柄が描かれている。

この図柄は、十七世紀初頭に元石灰町に住んでいた荒木宗太郎という船主が、自らが船に乗り込んでベトナムとの貿易を行っていた時に使用していた朱印船の旗印なのだろう。そしてこのマークの元々の意味は、「オランダ東インド会社のマークを上下逆さまにしたもの」だと説明されている。三角の斜辺に丸が付いたように見えていた文字は、実は、大文字の「V」に「O」と「C」を掛け合わせた「VOC」、つまり「オランダ東インド会社」のマークを上下逆さまに描いたものだったのだ（図3参照）。オランダ東インド会社への輸出用に作られた伊万里焼。真ん中にVOCのマークが入れている。東京都墨田区



図3

の江戸東京博物館で。今まで一つの文字だと誰もが思い込んでいたので解釈できなかったわけだが、実際は3文字のアルファベットを組み合わせて造られたマークであったのだ。

荒木宗太郎が、「逆さVOC」をなぜ自分のマークにしたのかということについては、オランダ東インド会社に似たマークを使うことによって、自分の朱印船を海賊から守ろうと考えたのではないかと言わ

れている。

だが、本当にそうだったのだろうか？ 今で言うところの、一種の「パチモン」の発想だったのではないかと思うのだ。韓国や東南アジアなどでは今でも、グッチのようでグッチでない、プラダのようでプラダでないといったパチモンのニセブランドバックを売っていることがある。

同じように荒木宗太郎は、当時の人々の憧れの舶来ブランドであった「オランダ東インド会社」のマークを真似た旗を使うことによって、自らが扱う貿易品に箔を付けようと考えたのではないだろうか。ニセブランドという言葉が、人聞きが悪く響くのなら、天下の東インド会社に「あやかろう」として、そのマークを真似たと言ってもよいと思う。

もっとも、この長崎くんちのただ一例だけでは、うつる船に描かれている通称「宇宙文字」が、オランダ東インド会社のマークであったということの証明にはならないだろう。他人のそら似かもしれないし、うつる船文獻に見られる、他の3つの宇宙文字については以前、謎のままだからだ。

だが、うつる船の「宇宙文字」にそっくりな文字が、四文字とも現れる江戸時代作品があることを見つけた。それが、この「勢州桑名渡」という浮世絵だ(図4)。額縁のように絵の周りを取り巻いている飾り枠の中に、「宇宙文字」に大変よく似た文字が、四文字とも描かれている。その四文字を「宇宙文字」と並べてみたのが図5だ。そっくりなことが分かるだろう。

だが、浮世絵の枠に描かれたこれら図形が、オランダ東インド会社



図 4

と関係しているという証拠はあるのだろうか？ 飾り枠上段の真ん中辺りを見てほしい。東インド会社のマークによく似た三角の図形が見える。そこから右に向けて描かれている文字が、「HOLLAND」と読めないだろうか。つまり「オランダ」である。オランダという文字と一緒に描かれている図形である以上、三角マークも、オランダ東インド会社のマークであると考えて差し支えないだろう。

つまり、謎の「宇宙文字」の正体は、当時の人々の憧れの舶来品であった、オランダ東インド会社の製品が、その包み紙にでも書かれていた西洋文字を、真似てそれっぽく書いてみたというものだったのだ。

そもそも、『兔園小説』のイラストには「最近、浦賀の沖に繫留したイギリス船にもこのような外国文字があった」という但し書きが付けられていた。つまり「うつろ船」の伝説を書き残した馬琴たちも、この文字を西洋の文字と解釈していたのだ。「宇宙文字」などという考え方は、UFO騒動が起きた一九四七年以降に生まれた新たな解釈に過ぎない。

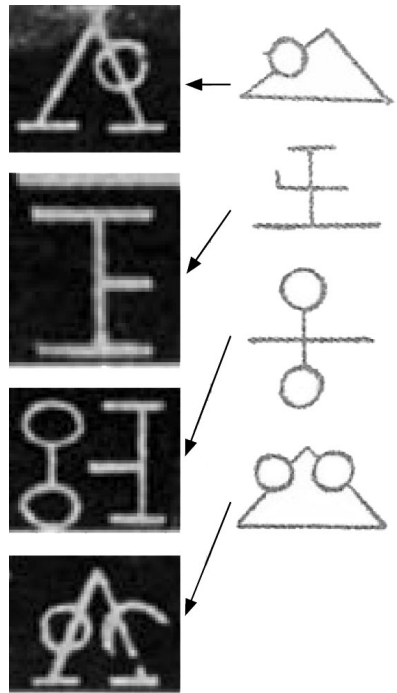


図 5

東京女子大学の屋名池誠教授の「横書き登場 日本語表記の近代」(岩波新書)によれば、この他にも「蘭字枠」と呼ばれている「西洋文字もどき」の飾り枠が描かれた作品として、深斎英泉の「江戸金竜山浅草寺観世音境内図」や北斎の弟子である柳々居辰斎の「六郷渡」、神戸市立博物館所蔵の「相州七里浜」といった作品が残されており、そのいずれもが当時江戸の馬喰町四丁目で版元をしていた江崎屋吉兵衛が出した出版物なのだという。

「蘭字枠」が付けられているのは、西洋絵画のように遠近法を強く効かせ、渡し船や海などが描かれている作品が多い。たぶん海の彼方へとつながる渡し船のエスニックなイメージを強調するハイカラな記号として、オランダ文字が飾りとして多用されたのではないだろうか。

しかし、あくまで舶来っぽさを出すための「演出としての文様」なので、正しい欧文の綴りである必要などなかった。そもそも誰も読めるわけもなく、当時の人にとって「舶来っぽい感じ」があれば、それでよかったのである。たぶん、うる覚えのまま適当に書いたので、欧文のようだが欧文ではない、変な記号列となってしまうたのである。また無理に解釈すれば、うつろ船文書にある二番目の文字は「E」、三番目の文字は「S」と読めないこともない。

屋名池教授によれば、このような「文様としての横文字」を使う流行が、江戸時代には、一八一〇年代を中心にした前期と、一八三〇年代を中心とした後期の二回あったと言う。浮世絵の飾り枠に西洋文字模様が使われたのは、後期の流行期のほうだ。ちなみに、馬琴が兔園会を催した文政八(一八二五)年という年は、この後期流行の時期にちょうど当てはまっている。

実は前年の文政七年五月に、常陸国の大津浜(現、北茨城市大津市)に、武器を持った英国の捕鯨船員二人が上陸するという「大津浜事件」が起きていた。うつろ船の話は、この実在の事件をヒントに創作されたのかもしれない。そしてこの事件をひとつのきっかけとして、翌年の文政八年に「異国船打払令」が出されている。

うつろ船伝説では、助けると後々面倒なので、異国の女性を乗せたまま再び沖合に流した、とされている。現代の感覚では、そんな大事件が起きたら、詳細を調べて幕府に報告しないわけがないと思うかもしれない。だが「打払令」では「調査の必要はなく、打ち払いそのままにしろ」とされている。つまり、そのまま海に帰るのが正解とされたのだ。うつろ船伝説には、異国人の来訪を「ただ、なかったことにしたい」と決め込む、あまりに無能な幕府への批判も込められていたのではないが。文政八年という年は、うつろ船伝説をデッチ上げるには、まさに格好の年であったわけである。

武力を持って開国を迫ってくるその一方で、珍しくて高価な憧れの品々をもたらしにくれる西洋の国々。海の彼方にあるという、まだ見ぬ国々に向け当時の江戸の市民たちが寄せていた、一種の「憧れ」と「恐れ」という、その揺れる心のはざまから生み出されたのが、「うつろ船」の伝説ではなかっただろうか。

#### 追記

以上、『兔園小説』の「うつろ船の蛮女」に描かれている通称「宇宙文字」の正体は、馬喰町四丁目で版元をしていた江崎屋吉兵衛が出版した浮世絵の周囲に描かれていた蘭字枠から抜粋された「蘭字もど

「き」ではなかったか、とする考察を行った。では江崎屋吉兵衛は、この蘭字枠の発想をどこから得たのか、また、どこからこの蘭字もどきを見つけてきたのか、という点になると、未だ何も分かっていない。「浮世絵研究家の方たちの先行の調査結果がもしあれば、ぜひ知りたいと思うところだ。

もしかしたら、「蘭字枠」とうつつる船の「宇宙文字」には共通のネタ元があって、どちらもそこから図形を拝借してきた、という可能性もありうるだろうと考えている。特にこれから、さらに多くのうつつる船のイラストが発掘され、うつつる船の絵が一八〇三年、さらにはそれ以前にも描かれていたことが分かってくる場合には、蘭字枠だけに宇宙文字の起源を求めることは難しくなるだろう。江崎屋吉兵衛がただ一人で、それほど長期に渡って「蘭字枠」の浮世絵を出し続けてきたとは考えがたいからだ。

また、以上の論考は、二〇一三年十二月六日に、中京大学文化科学研究所の主催で開催した『馬琴が記録した「うつつる舟」はUFOだったのか？』伝説の科学的検証と、世界のUFO説話』という講演会で話した内容が、元となっている。

この講演終了後、会場に来てくれた方から、「その程度の類似でよければ、甲骨文字のほうが似ているのではないか」という指摘を受けた。確かに例えば、甲骨文字の「冬」という文字は、八の字の下に丸が二つぶら下がったような形をしており、うつつる舟文献にある三角形の文字に似てはいる。

だが、甲骨文字の発見は一八九九年とされている。中国でまだ発見もされていない文字が、その発見の七十年以上に、すでに馬琴

らによって日本で記録されていたとしたら、それこそ「オーパーツ」であろう。それに、甲骨文字の専門家である立命館大の落合淳思助教によれば、甲骨文字は異体字も含めると全文で一萬二千字ほどあると言う。せいぜい数十文字しかない「蘭字枠」の文字数と比べ、これだけ多くの字数があれば、中には「他人のそら似」で似ている文字があっても別に不思議ではない。

うつつる船の「宇宙文字」のルーツが甲骨文字だということはありえないが、「蘭字枠」以外にも、宇宙文字のルーツの可能性を探る試みは、より広く行われるべきであろう。

#### 【参考文献】

- ・『日本隨筆大成』所収「兔園小説」日本隨筆大成刊行会、一九二八
  - ・加門正一『江戸「うつつる舟」ミステリー』楽工社、二〇〇九
  - ・『定本柳田國男集』筑摩書房、一九六一
  - ・尾名池誠『横書き登場 日本語表記の近代』岩波新書、二〇〇三
  - ・岩崎京子『我が名は荒木宗太郎』偕成社、一九九二
  - ・『怖い噂』17号「江戸時代のUFO事件 うつつる舟の真相」ミリオン出版
- 二〇一三年五月二十五日

本研究は二〇一三年十二月六日に講演会「馬琴の記録した『うつつる舟』はUFOだったのか？」伝説の科学的検証と、世界のUFO説話』を開催した。講師は岐阜大学名誉教授田中嘉津夫氏と科学ジャーナリスト皆神龍太郎氏である。皆神氏には特別にお願いして、講演の内容をここに「寄稿いただくことができました。また田中氏の講演内容については、前掲書『江戸「うつつる舟」ミステリー』をご覧ください。この場を借りて講師の両方に感謝申し上げる次第である。

中京大学文化科学研究中国研究グループ 明木茂夫